考古学研究所アルカ提供

Archaeological Laboratory,Co.,Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.164
2017.5.1

＊考古学研究所（株）アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器 ―E.S.モースと坪井正五郎のはざまで―

鈴木 正博

● 第15回 ● 椎塚貝塚の巨大深鉢と粗製土器

モースは大森貝塚の測定可能な遺物には**法量**を記述する。以後、陸平貝塚を始めとして坪井正五郎や東京人類学会の報告に継承され、山内清男の『日本先史土器図譜』にも踏襲される。特に「**加曾利B式（中位の古さ）**」では「**37.遠部出土。高さ65、口径30、底径9、最大径39、1/4。大形の土器。**」が土器型式の組成を規定する形制としてだけでなく、法量における「大形の土器」の定義としても注目される。前者は細別に関わる系統問題、及び地域的な生業道具に関わる問題でもあるためここでは措き、今は法量に注目した加曾利B式研究の曙光を椎塚貝塚に確認する。

山内清男が加曾利B式と指摘した椎塚貝塚の39個体（第11図）には**口径30㎝、高さ65cmを目安とする「大形の土器」**は見当たらない。唯一第11図1が口径30㎝を超えるものの、浅鉢である。モースの大森貝塚も坪井正五郎の西ヶ原貝塚も法量についていえば第11図の一般的な範囲を大きく超えるものではなく、そこで「大形の土器」という属性にも「加曾利B式（中位の古さ）」の標本としての意義を見出すならば、八木奘三郎・下村三四吉が注目する深鉢の法量問題は、第17図～第19図と同様に第11図を補完する椎塚貝塚の特徴としても学史的な結びつきが強い。

▲第20図　椎塚貝塚の巨大深鉢

具体的に確認するならば、第11図に準ずる「土器ノ完全ナラサルモ特ニ掲載ヲ要スベキモノ」として最初に取り上げられたのが第20図で、「（い）ハ形状水瓶ノ如ク其質頗堅牢ナリ、上縁ヨリ最下ノ横索紋迄ノ距離五寸八分、縁ノ厚サハ六分ニシテ、口部ノ外径ハ一尺一寸八分アリ、實ニ非常ナル巨大ノモノト云フベシ。」「（ろ）ハ別ノ土器ノ破片ナルモ、全体ノ形状ハ（い）ト同一ノモノナラント思ハル、而シテ上縁ノ開キ工合ニヨリテ考フレバ（い）ヨリ大ナランカ。」との記述にみるように**口径30㎝以上の深鉢**を「**巨大**」と形容することに意義を認め、これらを「大形の土器」の学史として**巨大深鉢**と呼ぶ。

第20図の巨大深鉢は口縁が内傾する独特の形態と口頸部に隆帯をも発達させる文様、そして粗雑な縄紋を有する**粗製**（モースではなく『日本先史土器図譜』）土器で、遠部の沈線文例と併せ常南総北に顕著な加曾利B2式である。蛇足ながらこの巨大深鉢の「**運搬**」には口縁直下の穴が機能的との指摘を踏まえれば、モースの「補修用」に対し、巨大深鉢は「運搬」が考察された。

椎塚貝塚の巨大深鉢は類例の有無も含め巨大という法量に意義を認めるだけではなく、加曾利B式粗製土器に附される文様系列としての年代的系統的視点も生成し、他に加曾利B3式の口縁外傾例も紹介されている。『日本先史土器図譜』は正に中位の例であり、巨大深鉢自体はその前後にも系統的に発達する地域性が顕著に観られるが、勿論大森貝塚は除外されることになる。

では、**加曾利B式遺蹟で7割前後の組成率を占める一般の粗製土器**については如何なる所見が得られているであろうか。それを知るためには全形が窺える第11図に戻り、縄紋施文の深鉢について、第11図「（二）ハ内部上縁近クニ凹線アリ、底部ハ無紋ニテ少シク欠損シ居レリ、一面ニ席紋アレドモ、底部ニ近キ二寸許ノ間ハ図ニ見ユルガ如ク都テ無紋ナリ。**此種ノ土器ハ多ク西ガ原ヨリモ出テ、且内外部何レカニ灰炭附着シ居リシガ、此器モ矢張両部一面ニ灰炭付着シ居レシ**。（中略）（十）ハ形状模様スベテ（二）ニ似タリ、底部ノ欠損シ居ルハ遺憾ナレドモ、全体ハ充分知悉シ得ベシト信ズ。」に加えて「又（二）及（十）ノ如キ、**蓄火器**ト思シキモノ此外**大小種々アリ**シモ、**大森貝塚ノモノニハ最少ナシ**、唯同篇第十版第四図**稍似タル所アリ**。」（ゴヂック体は引用者）との指摘に注目したい。椎塚貝塚の粗製土器は大きく二者が導出され、「蓄火器」とされる「大小種々」の**煮炊き用深鉢**（大森貝塚の「粗製」土器には煮炊きの指摘はなく、「煮炊き土器」との指摘は波状口縁深鉢が中心であり、生活様式の差が極めて大!）、及び貯蔵用の巨大深鉢が認められる。

畢竟、**大森貝塚の土器文化は、加曾利B式遺蹟とは異なり、粗製土器の僅少性も含め煮炊きの生活様式が異なるのみならず、文様帯や土器組成でも全く異なる系列として大森1、2、3式」の制定に至る。**

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

目　次

■加曾利B式土器　椎塚貝塚の巨大深鉢と粗製土器（第15回）　鈴木正博 …1
■考古学の履歴書　ことのはじまり（第8回）　間壁忠彦・間壁葭子 …2
■リレーエッセイ　マイ・フェイバレット・サイト（第157回）　山本哲也 …3
■考古学者の書棚　『神秘日本』　近藤孝光 …4

考古学の履歴書

ことのはじまり－「‥それでは　何だ」（第8回）

間壁 忠彦・間壁 葭子

3. 固まってしまった瓦経（3）

「于時応徳三年春二月於安養寺　　□□」…この文字を目にしたのは、1959年7月22日　「アツ‥願文!」

その日忠彦は、神戸新聞社主催の家島群島総合調査に、2日前から参加中だった。安養寺瓦経塚調査が終わり、三分割された粘土塊が、前年の12月後半倉敷考古館に持ち込まれてから、7ヶ月。

この瓦経塚発掘調査中に、「破壊中」という報によって、平行して緊急調査せざるを得なかったのが、総社市の隋庵古墳（当時はまだそうした状況が普通の時代）。その古墳の遺物整理（鍛冶具・武具・鉄器類・鏡・玉）と共に、2人は瓦経整理の毎日が続いていた7ヶ月である。

先回も記した事ながら、粘土塊から一枚の瓦経剥ぎ取りさえ大変だった。其の中の1字の文字を読み取るにも、柔らかい筆先に僅かに水を含ませて表面掃除による判読、これが強すぎると、文字は流失する。僅かな判読文字と多数の経典との対比‥先回に記した十種以上にのぼる経典も、実はその経典名にたどり着くまでが大変であった。多数の経典を暗記する僧侶の方でも、僅かな瓦経断片だけの文字から、即座に其の経典名が何かを明言されるとしたら、よほど周知された経の特異な部分に限られるだろう。

焼成のよい安養寺の第一瓦経塚では、経典は法華経と心経のみであったが、法華経には右側欄外に巻数と葉数の丁付けがあった。近隣の著名な播磨極楽寺瓦経には、小口に経名と巻の丁付けがあった。しかし粘土化したこの安養寺第三瓦経ではこうした点までの点検は望めなかった。

先に示した経典名も、従来から知られた数少ない瓦経塚（紙本経塚が幾千あるかも分からぬ中で、確実に瓦経塚といえるものは、三十例にも満たぬ）出土の各種経典名を先ずは手がかりに、膨大な大正新修大蔵経や、その他の経典資料から、全くの手探りで探したものだった。

今回の粘土化瓦経は方形だけでも300余枚は存在、円形・塔婆形品もある。アルバイト職員など居ないのはもちろんだが、これらの整理には、私ども二人以外は、誰一人手も貸さず、経文の1字も読んでいない。だが整理作業も、七ヶ月でかなり終盤に近づいていた。方形瓦経は立てた形で七列・上下二段積み、一列平均22～24枚という形であったから、上下段の実測略図を張り出して、それに判明した経典を、日々記入していった。

願文発見のその日も、書き込みをしながら、経文配列図も完成に近いなと思う日だった。問題の瓦経は下段最西列の南から2枚目。この経塚では、経典がカードを繰った状況が、この整理作業で、既に明白になっていたので、この位置と願文埋置の位置に特別の意味があったとは思えないが、他に願文と判明できた僅か1枚のものも、同じ列にあった24枚中の北から4枚目であった。そのため願文発見が、たまたま整理の順番で最後近くになったとも言える。

この瓦経も、勿論年号が読み取れなければ、即座に願文とは判明していない。もし例え年号記載の後に続いた三行の文字が読み取れていても、しばらくは不明経として悩まされたことだろう。しかし「于時応徳三年春二月　　」の文字が水に滲んだ粘土面で読み取れた時、「願文」と思ったその時が、現在までの生涯の中でも、一番興奮したのではなかろうか。応徳三年が西暦1086年と直ぐ確かめたが、其の後どうしても仕事が手に付かなかった。ただ嬉しいという気持ちだけで。その日すぐ家島へ便りを書いた。当時は電話など直ぐに通じるところではない。

この願文に続く部分は、年号を記した後の行1行開けて「□此諸功□□於□終時得見□陀佛無邊功」徳身我及□□者既見彼佛己□□離垢眼」□無上菩提」とあって後はすべて空白であった。願文最末尾であったことはいうまでも無い。

この瓦経の反面はかなり判読されたが、願文の始まりとは思えない内容であり、後日、同列にあった他の一枚から埋納経典名が列挙された1枚が発見され、少なくとも願文は2枚かそれ以上のものだったことが判明した。

経塚研究は既に多くの先学によって進められていた。わが国での経塚発生は、平安末期の貴族社会の中で末法思想が広がったことで、56億7000万年も後の弥勒出世の時まで、経典を保存するという基本的な考えに由来はするとはいえ、願文中には既に多くの願意は見られた。極楽往生・出離解脱・自他法界平等・現世利益・追善供養‥と様々で、時代が移るほどに浄土思想を中心にした、作善業となった、とされる。

しかし経塚の中でも古い時期に限られる、数少ない瓦経塚造営では、経典の不朽性を求め、多くの手間・経費も要する焼き物にした行為で、これは本来の弥勒出世までの経典保存を願う意図が強いとされていた。

当時、たまたま井上光貞氏の『日本浄土教成立史の研究』（1956年）を目にしていたが、其の中に記されていた、浄土思想の中心とされる源信の『往生要集』3巻末尾に記された文字が、目に飛び込んだ。当時は無意識の内にも頭の中にあったあの安養寺瓦経願文の末尾の文字と同じではないか、の思いで、瓦経願文の解読できなかった空欄に、『往生要集』の文字を埋めるとぴったり。この時は我ながら驚いた。

瓦経塚であっても、其の願意の要約は、現在生きる人々の阿弥陀仏による、極楽浄土往生へ願望とも見えた。このことは既に古く1965年10月に『岡山史学　第15号』（『日本考古学論集六・墳墓と経塚』吉川弘文館1987年再録）にある。

この瓦経塚で、今ひとつ悩まされたことは、次回に…。

間壁忠彦　略歴

1932年	岡山県児島郡甲浦村（現岡山市南区）郡に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部法学科卒業
1954～1973年	（財）倉敷考古館学芸員
1973～2006年	同上館長
1968～1998年	広島大学、1968～1980岡山大学非常勤講師（博物館学）、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講
1982～2005年	就実女子大学非常勤講師（考古学）、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講
2006～2015年	（財）倉敷考古館学術顧問

間壁葭子　略歴

1932年	岡山市門田屋敷（現岡山市中区）に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部史学科（日本史専攻）卒業
1955年	岡山大学法文学部副手（池田家文書整理）
1956～2015年	（財）倉敷考古館学芸員
1979～1986年	中国短期大学非常勤講師（歴史学）
1985～2004年	神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授（1991年まで）教授（2004年まで）、以後同大学名誉教授
1995年	明治大学で論文博士（歴史学）

隔月連載です。次回は岡田淳子先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト157

国史跡韮山反射炉 ～幕末の大砲製造工場

山本　哲也

韮山反射炉といえば、レンガ造りの煙突がそびえ立ち、その外壁に×印の鉄骨トラスが巡るイメージを思い浮かべる方々が多いであろう。関西出身の私も小学生の時に写真で見た韮山反射炉の前述のイメージが今も脳裏に残っている。

韮山反射炉が、平成27（2016）年7月8日に、世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産　製鉄・製鋼、造船、石炭産業」（以下、「明治日本の産業革命遺産」と表記）に登録された。「明治日本の産業革命遺産」は、19世紀半ばから20世紀初頭の約50年間の日本の近代化を示すものとして、山口県、鹿児島県、静岡県、岩手県、佐賀県、長崎県、熊本県、福岡県の8エリア、23資産から構成されている。韮山反射炉は製鉄・製鋼分野の黎明期に位置付けられ、幕府韮山代官の江川英龍により、領地内の韮山に築造された大砲製造工場である。

私事ながら、平成23年に伊豆の国市役所に入り、採用一年目にして韮山反射炉の発掘調査をする機会を得た。それまで近代遺跡について縁がなかったわけではない。かつて大分県に住んでいたとき、高橋信武さん（元大分県教育委員会）に連行（?）されて、平板を担いで西南戦争の激戦地となった、大分県、宮崎県境の山岳地帯に赴き、官軍、薩軍の陣地（台場）分布踏査、測量、スナイドル銃弾や火縄銃弾等の遺物を採集したことがあった。韮山反射炉の発掘調査にたずさわれることに不思議な縁を感じた。

韮山反射炉は、現存する連双2基のレンガ造りの煙突、炉体だけで成り立ったわけではない。文久3（1863）年「反射炉小屋場御用地麁絵図」（公益財団法人江川文庫所蔵）には、反射炉本体周囲に大砲等の製品を仕上げるための各種施設が描かれており、大砲製造工場の姿を知ることができる。反射炉を稼働するための燃料源となる石炭・木炭を保管する「炭置小屋」、反射炉の東に流れる古川の水力を動力とし、大砲の砲身をくり抜く「本錐台小屋」などである。

平成23年の発掘調査は、文久3年絵図の「本錐台小屋」、水力を動力とした「水車」、「水車」に水を供給した「箱樋」等の遺構確認を目的に実施した。反射炉本体から約20m北東に幅2.6m、長さ4.1mのトレンチを設定し、現地表面から0.7mにて遺構面を確認し造成土、炉床と想定される遺構を検出した。土層断面を観察すると、幾段階の造成が成されていることが分かった。造成土には径1mを超える川原石が残り、陶器擂鉢、瓦質土器の筒状製品（鋳型か）、鉄製のカスガイ、スサ入りの壁土などが出土した。現在の古川は改修されているが、かつては増水すると頻繁に氾濫を起していたことから、川原石を含む造成土はその痕跡かも知れない。炉床と想定される遺構は、ガチガチに硬化しており調査区外に延びる。確認のためサブトレンチを設定したが、工具ドライバーをあてて金槌で掘削しないと掘り下げることができなかった。観光客の方から、掘削する音を聞いて、「化石でも掘っているのですか?」と聞かれるほどであった。結果、硬化面の土層を観察すると、赤変が層状になしていることが分かった。炉床と想定したものの、この赤変が被熱を受けたものか不明であり再検討の必要がある。

発掘調査の結果、文久3年絵図で示された各施設の遺構は確認することができなかったが、幾段階にわたって造成がなされていたことや、硬化面を確認したことなど新たな知見を得ることができ、地下の遺構が良好に残されていることが分かった。

国重要文化財「韮山代官江川家関係資料」「江川家関係写真」（いずれも公益財団法人江川文庫所蔵）には、韮山反射炉に関する資料（古文書、絵図、大砲等設計図面、古写真等）が多く残されている。現在、伊豆の国市では韮山反射炉に関する資料の集成・翻刻作業を進めており、反射炉の築造経緯、資材の調達、大砲等の設計仕様など、さまざまなことが判明している。

近代の産業遺跡を考古学的に実証していくのは、他の時代の遺跡よりも、とりわけ遺構、遺物の解釈に難解な面がある。西南戦争を調査した高橋さんは、考古学・文献資料の総合的な分析を行い、大分県・宮崎県境の西南戦争の実像を明らかにした。この研究により西南戦争遺跡（熊本県熊本市・玉東町所在）の国史跡指定の原動力となった。高橋さんのバイタリティのある姿勢には到底及ばないが、韮山反射炉について豊富な情報をもったイメージが描けるよう調査研究に努力していきたい。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは中山誠二さんです。

▲調査現場から反射炉本体を望む

▲調査区全景（手前：造成土、奥：硬化面）

考古学者の書棚

「神秘日本」

岡本太郎／中央公論社 (1964)

近藤　孝光

私にとって「考古学者の書棚」とは「神村文庫」である。「神村文庫」とはアルカ通信にもご連載いただいている神村透先生より、蔵書の一部を私が勤める株式会社アルカに寄贈いただいたものであり、文字通りの考古学者の書棚である。

社内にある「神村文庫」の書棚に並んだ書籍を見て、一生かかっても読み切れないな、という凡庸な感慨とともに、美大出身の私は考古学者とはこれ程大量の書物を読むものかと驚いた。しかも神村文庫は蔵書の一部で、ご自宅では本の重みで部屋の床が抜けた、との噂話も伺っている。考古関係者の間では良く聞く話かと思うが、最初は冗談だと思って聞いていた。また、蔵書の分野も多岐にわたることにも驚いた。仕事の合間や帰宅前に、書棚の前に立ち、気になる本を見つけては少しずつだが勉強をさせていただいている。

今回、紹介させていただく本も書棚で発見した一冊であり、絵画が好きな私には手に取りやすい一冊であった。

岡本太郎は著作も多く、没後も再編集版や関連本が多数出版されている。私が手に取った『神秘日本』は1964年に刊行されており、以下六編の紀行文である。

「オシラの魂　―東北文化論―」
「修験の夜　―出羽三山―」
「花田植　―農事のエロティスム―」
「火、水、海賊　―熊野文化論―」
「秘密荘厳」
「曼荼羅頌」

目次だけでは少し解りづらいが「花田植」は広島県山県郡の農耕儀礼を訪ね、「秘密荘厳」「曼荼羅頌」では高野山と高雄山で密教とマンダラを巡る芸術論が展開される。

岡本太郎は1930年から1940年のパリ滞在中にマルセル・モースのもとで民族学を学んだと言われており、本書でも民族学者としての論理的な解釈が随所にみられる。しかしそれ以上に芸術家としての直感が先行している感もあり、この本の評価が分かれる点でもあると思う。ここでは私が惹かれた一編について主に触れたいと思う。

「オシラの魂　―東北文化論―」では青森県の霊場、下北半島恐山と津軽半島川倉を巡り、イタコ、オシラさま信仰を中心に、1960年代当時のイタコがシャーマンとしてどのような社会的立場であったかを考察しつつ、原始日本のシャーマン的存在の可能性に触れて「縄文文化の土器、土偶の、奇怪な呪術的美学がこの気配に対応していないだろうか」と述べている。

さらに「こんなにも沢山、なまなおばあさんの姿を見たのは今度の旅行がはじめてだ。」と言わしめた“口よせ”にあつまる「婆さん」「おがさまたち」から浮かび上がる「女性像」に、原始よりつづく生と死を、生活の現実的な残酷さを、そしてそれらを覆う無邪気でおおらかな生命力を見いだしている。

岡本太郎も「あの口よせをしている巫女さんはもちろん、あそこに集まっている婆さんたち一人一人が、それぞれの分量において、呪力をもっているのではないか。その相互のからみあいが、神秘をもりあげているのだ、と思った。」と述べているが、私はシャーマンであるイタコ以上に「婆さん」「おがさまたち」に岡本太郎の言う「呪力」を強く感じる。そしてこの、他者からの「呪力」によって媒体としてのシャーマンが立ち現れるのだろう。

縄文土器の美を“発見”した芸術家として、考古学関連の書籍にも名前があがる岡本太郎だが、メディアでのオーバーな自己演出と著書から受ける印象の差に、私は岡本太郎自身にも、なにかシャーマン的な姿を思い描いてしまう。きっと縄文時代の「婆さん」「おがさまたち」(性別や年齢を限定するつもりは無いが)によってつくられた縄文土器にも、この「呪力」が宿っているのかもしれない。

株式会社アルカではあらゆる時代の石器と土器全般の実測図作成等、遺物整理を中心とした業務を行っている。遺物に相対する際には、「呪力」はわきに置き、客観的な姿勢と視点を心掛けているつもりである。しかしそれとは別に縄文土器に接するとき、やはり驚くことがある。岡本太郎が別の著書でその驚きについて、植物の拡大写真を見たときに同様な驚きと戦慄を感じた、といったことを書いていたが、共感される方はどのぐらいいるのだろうか。この「驚き」はいったい何なのであろうか。『神秘日本』はその「驚き」の根源、「神秘」を探る旅の記録なのだと思う。

最後となり恐縮ですが、蔵書を寄贈いただいた神村透先生に改めて御礼申し上げます。資料をより活かせるように精進していきたいと存じます。

アルカ通信　No.164

発行日　2017年5月1日
企　画　角張淳一(故人)
発　行　考古学研究所（株)アルカ
〒384-0801　長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp　URL：http://www.aruka.co.jp